2019年７月３日

博士学位審査　論文審査報告書（課程内）

大学名　早稲田大学
研究科名　大学院人間科学研究科
申請者氏名　小川　祐子
学位の種類　博士（人間科学）
論文題目（和文）　がんに罹患した母親が病気について子どもに伝える際の促進・阻害要因と母親の心理的適応
論文題目（英文）　Psychological Adjustment of Mothers with Cancer and Promoting / Obstructing Factors When Telling Their Medical Condition to Their Children

公開審査会
実施年月日・時間　2019年６月24日・13:00-14:00
実施場所　早稲田大学　所沢キャンパス　100号館　第一会議室

論文審査委員

	所属・職位	氏名	学位（分野）	学位取得大学	専門分野
主査	早稲田大学・教授	鈴木　伸一	博士（人間科学）	早稲田大学	臨床心理学
副査	早稲田大学・教授	熊野　宏昭	博士（医学）	東京大学	臨床心理学
副査	早稲田大学・准教授	大月　友	博士（臨床心理学）	広島国際大学	臨床心理学
副査	聖路加国際病院 小児科・医長	小澤　美和	医学博士	北里大学	小児リエゾン

論文審査委員会は、小川祐子氏による博士学位論文「がんに罹患した母親が病気について子どもに伝える際の促進・阻害要因と母親の心理的適応」について公開審査会を開催し、以下の結論を得たので報告する。

公開審査会では、まず申請者から博士学位論文について30分間の発表があった。

1　公開審査会における質疑応答の概要
申請者の発表に引き続き、以下の質疑応答があった。
1.1　＜コメント＞本研究はがん患者とその家族の支援につながる意義深い研究である。
1.2　＜コメント＞中間報告会では、対象者の背景要因による違いを細かく検討すべきとコメントしたが、本論文ではそれらについて丁寧な分析と考察がなされていた。
1.3　＜質問＞研究１において、早期がんの人の抑うつが相対的に高い理由として、乳がん患者のホルモン療法の副作用の影響が結果に反映されているのではないか。

＜回答＞その点を踏まえた分析を追加して行い、加筆・修正したい。

1.4　＜質問＞研究２－１の結果は研究２－２ではどのように反映されているのか。また、研究２－２において両因子に重複して含まれる項目を削除しているが、葛藤の項目としては重要ではないか。

＜回答＞研究２－１の主たる目的は項目収集であったので、下位概念項目を研究２－２における項目案として採用している。また本研究では、促進要因と阻害要因を明確に分けて評価できる尺度を作成する目的から重複項目は削除した。

1.5　＜質問＞研究２の対象者には乳がん患者が多く含まれていたが、作成された尺度は乳がん患者の特徴を反映した内容であると理解するべきか。また阻害要因の尺度において、がん種および子どもの年齢との相関が示された項目があるが、どのような傾向を示しているのか。さらに、促進要因と阻害要因との相関関係はあるのか。

＜回答＞項目内容から判断すると乳がん患者に特有の尺度というものではないと考えられる。しかし、いくつかの項目で乳がん患者の得点が相対的に高く、子どもの年齢との相関も示されていることから、項目得点と属性との関連性を再検討して考察を深めていく。なお、促進要因と阻害要因との相関関係は認められなかった。

1.6　＜コメント＞研究２で検討された促進・阻害要因は、これまでの先行研究とも整合する妥当な内容である。促進要因と阻害要因は表裏の関係である。母親は子どもの変化を嫌い保護的になるが、子どもは成長し変化していくものだと理解できるとポジティブな対応ができるようになる。本研究の知見を臨床応用していく際には、母親のニーズに加えて、子どものニーズも踏まえた支援になるとよい。

1.7　＜質問＞研究３の「伝えた程度」得点の３と４の違いは何か。また、「伝えた程度」の名称は「伝えた段階」などの表現のほうが適切ではないか。

＜回答＞得点の３は行動変容ステージモデルに基づく「準備段階」、４は同じく「実行段階」を示している。なお、「伝えた程度」の名称は「伝えた段階」に変更する。

1.8　＜質問＞研究１においてはPTGが重要な要因として考察されているが、研究３ではPTGには変化が見られていないのはなぜか。

＜回答＞研究３の縦断研究は測定インターバルが１か月なので、PTGに変化をもたらすような十分な期間ではなかったと考えられる。

2　公開審査会で出された修正要求の概要

2.1　博士学位論文に対して、以下の修正要求が出された。

2.1.1　乳がん患者の抑うつ得点にホルモン療法の副作用が影響しているかについて分析を加えて考察するべき。

2.1.2　阻害要因の尺度に関して、項目得点とがん種および子どもの年齢について連関関係があるか検討して考察するべき。

2.2　修正要求の各項目について、本論文最終版では以下の通りの修正が施され、修正要求を満たしていると判断された。

2.2.1　乳がん患者におけるホルモン療法の有無と抑うつ得点との関連を検討したが、

有意な差は認められなかった。このことを含めて早期がん患者の抑うつ状態について考察を加筆した。

2.2.2　阻害要因の尺度に関して、項目得点とがん種および子どもの年齢の連関について検討したが、特徴的な関係は認められなかった。このことから阻害要因の尺度の項目特性については明確な結論は得られなかったが、サンプルのがん種分布から乳がん患者の特徴がある程度反映されていると考えられ、今後さらなる検討が必要であることを加筆した。

3　本論文の評価

3.1　本論文の研究目的の明確性・妥当性：　本論文の研究目的は、精緻な文献展望から先行研究における問題点および課題を抽出した上で明確に設定されている。また研究目的の内容についても、国が定めたがん対策推進基本計画の理念に合致したものであり、社会的意義および妥当性も高いといえる。

3.2　本論文の方法論（研究計画・分析方法等）の明確性・妥当性：　本論文では、研究目的を達成するために、子育て中の母親がん患者の現状を把握するための観察研究、促進・阻害要因の概念抽出のための質的研究およびそれに基づく尺度開発、さらには、介入効果を検討するための縦断的研究を計画し、いずれも精緻な手続きによって研究が行われた。また、各研究の方法論およびデータ解析は、心理学および関連領域の先行研究の手法を踏襲した妥当な方法である。さらに、研究対象者の属性分布は、本論文が想定する母集団における一般的な分布とおおむね一致しており、データの妥当性も高いといえる。したがって、本論文の方法論は明確かつ妥当であると判断できる。なお、本博士学位論文の内容を構成する研究は、早稲田大学「人を対象とする研究に関する倫理審査委員会」の承認（承認番号：2015-337、2014-282）を取得し、参加者への十分なインフォームドコンセントを行った上で実施しており、倫理的な配慮が十分になされていると評価した。

3.3　本論文の成果の明確性・妥当性：　本論文の成果は、これまでの先行研究において質的研究によって示されてきた知見に対応した妥当な内容であるとともに、それらを定量的、かつ実証的に検討した点において明確性も非常に高い。以上のことから、本論文の成果の明確性・妥当性は高いと判断できる。

3.4　本論文の独創性・新規性：　これまで，この領域の研究は記述的・質的研究が多かったが，本論文は，子育て中の母親がん患者の心理的適応と親子コミュニケーションの実態について定量的に検討した数少ない貴重な研究である。また、母親が自身のがんについて子どもに伝える際の促進・阻害要因を評価するための尺度を開発するとともに、それらに基づく母親がん患者へのサポートの効果を検討した独創的な研究である。これらの成果は、本邦における子育て中の母親がん患者への支援を充実していくための貴重な資料となるものである。以上のことから、本論文の独創性・新規性は高いと判断できる。

3.5　本論文の学術的意義・社会的意義：　日本においては、子育て中にがんを発症する母親が増加傾向にあり、子育て中の母親がん患者への支援は、医療的ケアにとどまらず、

家族コミュニケーションへのサポートや子育て支援も重要なテーマになっている。本論文は、がん医療が抱える重要な問題の解決に向けた具体策の提案に資する貴重な研究であり、社会的意義は大きいと判断できる。また、がんを発症後の母親を対象とした研究は、母親自身が混乱している時期でもあることから、研究協力を得ることがとても難しいので、研究数が非常に少ないのが現状である。本論文は、そのような対象者に系統的な研究を行い、子育て中の母親がん患者の親子コミュニケーションの実態について明確な知見を得た点において学術的意義も大きい。以上のことから、本論文の学術的意義・社会的意義は高いと判断できる。

3.6　本論文の人間科学に対する貢献：　我が国のがん対策は、医療サービスの充実にとどまらず、がん患者の生活および人生の質の向上のための心理・社会的ケアなどの統合的支援を重視している。これらの統合的支援の背景となる学問領域は、本学術院が目指す学際的人間科学そのものである。本研究は、子育て中の母親がん患者の心理適応と親子コミュニケーションの問題について、対象者の病状、治療歴、年齢、家族構成、心理状態などの生物・心理・社会的側面から検討し、学際的人間科学の視点から考察し、がん患者への統合的支援の具体策について提言をまとめた。以上の点から、本論文の人間科学に対する貢献は高いと判断できる。

3.7　不適切な引用の有無について：　本論文について類似度を確認したうえで精査したところ、不適切な引用はないと判断した。

4　学位論文申請要件を満たす業績（予備審査で認められた業績）および本論文の内容（一部を含む）が掲載された主な学術論文・業績は、以下のとおりである。

・小川祐子，小澤美和，鈴木伸一：2019　がんに罹患した母親の病状を子どもに伝えた後の母親の心理．総合病院精神医学．31巻2号，184-192頁．

・小川祐子，長尾愛美，谷川啓司，鈴木伸一：2015　外来がん患者が抱える主治医と話すことへのためらいと患者のコミュニケーション行動との関連．行動医学研究，21巻1号，22-30頁．

・小川祐子，武井優子，古賀晴美，島田真衣，長尾愛美，佐々木美保，国里愛彦，谷川啓司，鈴木伸一：2015　補完代替療法を受ける外来がん患者を対象とした主治医と話すことへのためらいの構成概念の検討．心身医学，55巻7号，873-883頁．

5　結論

以上に鑑みて、申請者は、博士（人間科学）の学位を授与するに十分値するものと認める。

以上